

## 雲林院城(津市芸濃町雲林院城山)(林光寺背後)

安濃川上流の芸能町雲林院(うじい)地区から県道42号を西に向かうと、左手に美濃夜神社が見えてきます。この神社は、かつて溝渕大明神と呼ばれ、神社に残っている弘治元年(1955年)の棟札には、寄進者として雲林院氏の名前が記されています。雲林院氏は、鎌倉～室町時代に、現在の美里地域に本拠を置いた長野氏の一族で、神社裏の山頂にあった雲林院城の城主だったとされています。城跡は、平地との高低差が70mほどあり、東に安濃川の上流から中流までを望むことができ、白跡を川沿いに西へ向かうと伊賀地域へと至る交通の要衝でもありました。

雲林院氏は長野氏とともに、北勢の関氏、中南勢の北畠氏らと抗争と和睦を繰り返して地域支配を支え、一族の中で長野氏に次ぐ格の高さであったことが、室町時代の資料からうかがえます。永禄年間(1557～69)年には長野氏とともに北畠氏の配下となりましたが、織田信長の伊勢侵攻の際には、長野氏の養子に入っていた北畠具藤を追放し、織田信包(信長の弟)を養子に迎え、織田方に下ります。その後、雲林院氏が安土城の留守を預かる役の一人であったという記録も残っています。

雲林院城跡には、山頂の主郭を中心に複数の尾根筋に広がり、多くの曲輪や堀切が設けられていた当時の様子をしのばせています。主郭の背後も、堀切や土塁で守られた強固な造りで、当時の守りの堅さをうかがい知ることができます。



東側から見た雲林院城跡の遠景(鉄塔手前の山頂付近が主郭)



## 雲林院祐基

雲林院 祐基（うじい すけもと、生没年未詳）は、戦国時代の武将。出羽守。慶次郎、慶四郎。「雲林院大夫」「祐尊」も同一人物か。父は長野工藤氏の当主・長野植藤。子に祐光、矢部家定室。

### 生涯

長野工藤氏の分家である雲林院氏を継承した。織田信長の伊勢侵攻で長野工藤氏は信長の実弟・織田信包を養子に迎えることになったとき、祐基はそれを認めて臣従した。その後は信長に接近して雲林院氏の存続を図ったが、一方で信包とは対立したため、天正8年（1580年）、居城・雲林院城を奪われて追放された。

そのため、婿の矢部家定を頼って安土へ行き、家定の執り成しによって微禄ではあるが信長の直臣として召し抱えられた（勢州軍記）。信長死後は伊勢に戻り、天正12年（1584年）の小牧・長久手の戦いでは羽柴秀吉に属した。

子の祐光は滝川一益の婿であり、諸国を流浪した後に豊臣秀吉に召抱えられたといわれる（勢州軍記）。

Wikipediaによる

元徳3年・元弘元年(1331年)雲林院祐高によって築かれたと云われる。 雲林院は長野城主二代長野祐藤の子祐高(祐尊)が雲林院氏を名乗ったことに始まる。

雲林院氏は長野氏一族としてその中核にあつて代々続いたが、永禄年間(1558年～1570年)に長野氏は織田信長に降つて弟信包を養子として迎えて家督を継いだ為、雲林院氏も織田氏の配下となった。 天正8年(1580年)長野(織田)信包は雲林院氏を追い払おうと老臣野呂民部少輔を謀殺し、雲林院出羽守父子は伊勢を追い出され廢城となった。

城郭放浪記によると



美濃夜神社と背後の城跡